

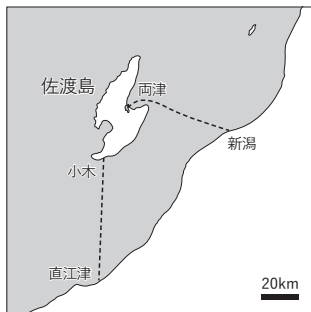
地域資源を題材に、探究マインドを育む

体験プログラムの開発

斎藤 紗織

―団体名―佐渡科研究会（新潟県佐渡市）

―事業名―佐渡島こども修行プロジェクト



地域課題の解決を担う

アクターの育成に向けて

佐渡島は、標高一一七二メートルの金北山^{きんぽうさん}、新潟県最大の湖である加茂湖^{かのみこ}（汽水湖）、国中平野などの地形がもたらす自然資源、金銀山・佐渡おけさ・鬼太鼓・能など歴史文化に恵まれ、農業や水産業、観光業が盛んな、まさに宝の島です。しかし現在、急速な人口減少による地域コミュニティや学校の弱体化が深刻となるなど、この島の暮ら

しと産業は危機的な状況をむかえています。これまでに、トキの野生復帰事業などユニークな自然共生の取り組みを行なったり、二〇一〇年頃から佐渡市教育委員会が推奨する地域学「佐渡学」を学校の授業で実践するなど、地域や教育において課題解決に向けた活動を展開しているにもかかわらず、それらに取り組むアクター（主体となって行動する者）がいない、もしくはいても十分に育っていないのが現状です。

私たちは、将来の社会や産業をより

強固なものにしていくためには「探究マインド（探究心）」をもったアクターの醸成が不可欠で、「触れる」「かわる」などの実体験こそがその始まりだと考えています。そこで二〇二一年一月、小学生から高校生までの「島のこども」を対象に、地域資源の魅力に触れる、かわることで探究心を生み、育むプログラムを開発する「佐渡島こども修行プロジェクト」を立ち上げました。同プロジェクトのチームは、佐渡ならではの学びを探究する団体「佐渡



見本と似た石を探す「石ころ神経衰弱」の様子。

科研究会（二〇一九年設立）の二十〜四十代の有志男女六名で結成しました。プログラムの開発に向けては、メンバー肝入りの地域素材をテーマにすること、体験活動を行なう際は経験の有無にかかわらず地元の方に講師をお願いすること、地域課題に取り組むアクターとして必要な要素（対話をする、共に考える、協働する、アクションを起こすなど）の習得・向上の観点を加えることなど、こどもの探究心を刺激し、高め

ることができると「修行」のような内容を目指し検討を重ねました。

探究心を育てる

全六回のプログラム

体験プログラムは、「湖」「石」「田畑」「野草」「竹」「食」をテーマに全六回実施しました。アクターとしての探究要素と各回の修了試験をセットにした二〜三時間の半日プログラムで、メンバーがコーディネーターとなり、講師との打ち合わせや下見などを行ないながら内容を決めていきました。

例えば「石」では、千畳敷海岸で見本の石と似た石を探し、その理由をブレゼンする「石ころ神経衰弱」を行ないました。「食」では、柿農園で生産者から柿の生育に関する説明を受けた後、柿の剪定と加工（干し柿作り・渋抜き）を体験、それらを基に参加者がアイデアを出し合いながら「柿すごろく」を作

成しました。従来の自然体験イベントと異なり、こどもの力を信じて余計な支援を行なわないことで、彼らが自ら考え、課題解決に挑戦していくことをねらいとしています。

結果、全プログラム合計の参加者は五九名。下は小学四年生から上は二二歳まで、島内全域からの参加がありました。

報告会の実施と冊子の作成

全プログラム終了後、プロジェクトの成果や課題を共有する報告会「佐渡島天下一こども修行会二〇二一」を開催しました。大雪のためさまざまな行事が中止になる中、佐渡市教育委員会関係者や新潟大学の先生をはじめ、約三〇名の方々が集まり、コーディネーターによる各プログラムの紹介や参加したこどもたちによる発表、報告会に出席した全員による意見交換などで、



「田畑」の回では大人も交じって蕎麦の収穫を体験した。

プロジェクト内容を楽しく共有することができました。また「修行修了の認定式」も行ないました。

報告会後は、本プロジェクトの活動を「最終奥義 皆伝の書」として冊子にとりまとめました。各プログラムでの実施内容はもちろん、学校向けに参加人数に応じたプログラム案を記載するなど、広く教育現場で役立てられるように工夫しました。完成した冊子は、市内の幼保小中高の教育機関や図書館、市の教育委員会のほか、新潟市立図書館にも寄贈させていただきました。「こども修行」のコンセプトが島内外に広

く共有されることを期待しています。

―事務局のチームワークの醸成―

こども修行の趣旨を踏まえたプログラムを実践していく上で、果物ナイフによる柿の加工や、鎌を使った蕎麦の収穫など、どうしても危険がともなう活動を避けられない場面もありました。幸い、ケガや事故は起こりませんでした。だが、事前の安全確認や保護者への丁寧な説明、万一に備えた救急セットの準備などトラブル回避やリスク管理の大切さを実感しました。このほか感染症対策にも工夫を行ないました。屋外の体験活動であれ、屋内の座学であれ、こどもたち同士の活動は「密」になっ

てしまします。消毒や検温など徹底したほか、市内の感染状況を勘案した独自の中止ラインを設けました。

これにより参加者や講師の急なキャンセル、体験プログラムの延期なども

発生しました。そこでSNSとウェブ会議システムを活用し、メンバーによるミーティングをいつでも気軽に実施できる環境を整えたところ、緊急時の連絡はもちろん、各自の進捗確認、悩みの相談や助言などを適宜行なう「場」が生まれました。こどもだけではなく、事務局のチームワークの醸成や、プロジェクト運営スキルの向上にもつながったと感じています。

―保護者やメンバーの意識の向上―

帰り道に体験したことを自分から話してくれたんです。こんなこと今までなかったのに――。参加者の保護者にも実施したアンケートへの回答の一例です。ほかにも同様の回答が見られ、本事業はねらい通り、こどもたちの探究心を育むことができたのではと考えています。自分たちの日常から問いを見つけてもらうことで、参加したこども

離島人材育成基金助成事業 事務局より

離島人材育成基金助成事業は、その名の通り人材の育成を大きな目的のひとつとして離島の皆さんの活動を応援しています。「佐渡島こども修行プロジェクト」は、佐渡のこどもが地域課題を主体的に考え、解決に向けた行動につなげていく「探究心」の醸成を目指した活動でしたが、保護者アンケートの結果からは、当初のねらい通り、こどもたちの地域に対する関心が高まったことが伝わってきました。さらに、こどものみならず保護者や運営メンバーの「探究心」の醸成にもつながったことは本事業の大きな成果だと思います。

事業成果を報告書としてまとめ、島内の教育機関などに配布したことで、今回開発した体験プログラムが今後の教育活動のヒントとして有効に活用されると思います。また、活動の大部分を創意工夫によって内製化し、外注する場合も島内の事業者に発注するなど、経費のほとんどを島に還元していたことも本事業の特筆すべき点です。

斎藤 紗織 (さいとう さおり)

新潟県公立小学校教諭(理科教育学)。中学生の時に生まれ故郷の大阪から佐渡島に移住。佐渡に惚れ込み、「一生ここに住む!」と決意。現在、「佐渡科研究会」の代表として、「佐渡島だからできる学び」を探究中。



活動の成果をまとめた「最終奥義 皆伝の書」。

たちの佐渡島(当たり前の風景)に対する「解像度」を上げられたことが本事業の最大の成果です。

また、保護者の「私たちも修行したい」との希望を受け、「田畑」の回では

「大人も修行プロジェクト」と題して蕎麦の収穫と座学に参加してもらいました。「今回初めて考えたことも多く、勉強になった」などの感想をいただき、こどもだけでなく大人も佐渡島のことを知りたい・考えたいという意向を持っていることを確認できたのも、次なる展開につながる良い結果だと思っています。人材育成の面では、コーディネートターをつとめたメンバーにも素晴らしい成果をもたらしました。プロジェクトの終了後、彼らは各々の関心事に対し

て自発的にアクションを起こすようになりました。例えば、自然活動をしている島内の団体や個人をつなぐプラットフォームづくりに取り組み始めたり、高校生の活動支援を行なう団体を立ち上げたり、地域活性活動に運営側で参加するなど、「自分も何かを変えられる」という成功体験がメンバーの行動の変容につながっています。今回のプロジェクトが起点となって、さまざまなアクションが佐渡島に生まれることを期待しています。